

聖家族

福音朗読 ルカ 2・41-52

2024.12.29 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

だいぶ前に、わたしに先輩の神父さんがこんなことを話してくれたことがあります。その神父様はもうすでに亡くなっておられますけども、こういう話をしたんです。

「神様に見捨てられるっていうことがどういうことか分かるか？」って聞いてきて、で、「それは、いろんな大変なことが起こるとか、すごい苦勞が振りかかってくるということではないぞ。神様に見捨てられるということは、むしろなんにも問題が起こらない、何も無い、そういうことだ。なぜならば、わたしたちが信じている神様は十字架を通して復活へと導かれる方だからなんだ」というそんな話です。つまり、苦勞を通してわたしたちが神様に会い、そしていろんな気づきを与えられていく。そして神とともにある者にされていく。そういうことを言いたかったんだなあと思うんです。

わたしたちはつい数日前にクリスマスのお祝いをして、闇の中にでも光が輝いている、いろんな困難があるけど、しかし神様がともにいてくださることをいつも示し続けて、わたしたちが忘れるならば絶えずそれを思い出させてくれるという信仰、希望を新たにしたいと思います。この希望は、何も問題がないから希望できるのではない。いろんな困難の中にあっても、しかしそれを通して神様とともにある、その希望なんだということができると思うんです。

バチカンのクリスマスイブのごミサの説教の中で、フランシスコ教皇様は、お生まれになった幼子がわたしたちの希望であって、そしてその希望はインマヌエル——「神はわたしたちとともに」っていう、お生まれになった幼子がそう呼ばれるであろうというマタイの福音書にありますけども——神がともにおられるという希望なんだという話をされました。

そのわたしたちの希望っていうのは、何かハッピーエンドをただ受け身的にずっと待っている、そういうものではない。むしろ神様とともにあるっていうこ

とを通して、わたしたちの側が一步踏み出す。教皇様は「巡礼者になる」っていう、そういう表現を使われましたけども、それはどこか旅行に行くっていうことではなくて、自分たちの今の心地良い場所から一步踏み出すっていう、そういうことなんだと思います。そして特に弱い人たちの犠牲の上に悪や不正がはびこっているそのことに心を向ける、そういうことと自分には関係ないって思うならば、わたしたちはこの希望とは無関係な者になってしまうというわけです。むしろ、わたしたちが自分自身のそういう心地良さとかの中にも留まろうとすると、あるいは間違いを犯す危険からいつも距離を取ろうとする、あるいは他の人のことは考えないで自分のことばかりを計算するってそういうことがキリスト者の希望ではないです、とおっしゃいます。

むしろ忍耐強く神様のみこころが実現するのを待ち望みながら、わたしたちの側もそれが少しでも早く実現するように一步出る、そして主とともにある、それがわたしたちの希望なんだということが出来ます。だからその希望を見出す方向を見誤ってはならないということなのだと思います。

今日の福音では、イエス様の家族、マリアとヨセフが巡礼の途中でイエス様を見失って、そしてまた見出しましたっていう、そのエピソードが朗読されました。過ぎ越しの祭りの時に多くの人がエルサレムに巡礼に行く。一説によればもう町の人口が何倍にもなるっていう大変混雑した中で、でも1人のイエス様を見つけ出すっていうのは大変な困難だったわけですね。その困難は思いやられるわけですが、それはある意味ではわたしたちが日常の生活やこの世界の現状の中で希望を見出すっていうことが簡単ではない、でも確かにそこにあるんだ、ということを表しているように思います。

ルカの福音書は二人の人がイエス様を見失いました、だけど見つけましたっていうそのエピソードを、イエス様の宣教活動と死と復活の、最初と最後に配置して、イエス様の活動を挟んでいるんです。最初が、今日のマリア様とヨセフ様がまだ少年のイエス様を見失いました、でもエルサレムに戻って見出しました、見つけました。後の方は、イエス様が十字架にかかって亡くなった後に、二人の弟子がもう希望を失ってエルサレムから故郷へ戻って行こうとしていたときに、でもイエス様が旅人の姿で追いかけて来て、神様の計画を説き、そして最終的に二人がまた方向を変えてエルサレムに戻って弟子たちと合流した、そういうエピソードがあります。イエス様を見失い、でも見つけました。マリアとヨセフは

一行の中に、旅の道連れの中に探してたけど、「ここじゃない」って言ってエルサレムに戻ったわけです。十字架にかけられてイエス様が亡くなった^{あと}後、絶望してエルサレムから去ろうとしていた二人の弟子は、イエス様がわざわざ追いかけて来て、「あなたたちの行く方向はそこじゃないよ」ということを、連れ戻しに来られたわけです。そのようにして再びイエス様を見出す。そのエピソードが、ルカの福音書が最初と最後にイエス様の活動を挟んでいくのは、わたしたちが容易にイエス様を、つまり希望を求める方向を間違えてしまうからと言えるのではないかと思います。

わたしたちはいつも自分の心地良さ、安全の方に希望を求めがち。しかし主とともにあることが希望であるとするならば、そこから一步踏み出して他の人々の苦しみに対してともに苦しむ、その中にまた自分の苦しみを通して他の人々の苦しみとつがるように心を開く。そこに希望があるんだということをルカの福音書の「イエス様を見失いました。でも戻ったら、あるいは違うところに見つけました」っていう、自分たちが思っていたところではないところに見つけましたというエピソードが示しているように思います。

今日わたしたちは聖家族の祝日のごミサをお捧げしてますが、これは核家族を賛美する祝日じゃありませんね。むしろイエス様を中心としてみんなが神の家族になってそれぞれの痛みを分かち合い、また喜びを分かち合う者になりますようにっていう希望を表していると思います。

わたしたちがそれぞれ、お生まれになったイエス様、ご降誕の恵みに照らされながら、この闇の中に希望をもたらす、あるいは見出す者とされていきますように、それぞれの中で神様の、イエス様の導きと、そしてともにあるその恵みを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>